

論点整理（ご助言いただきたいポイント）

背景1：ダム完成は令和17年度としているが、完成前に実施する試験湛水も10年程度先となり、試験湛水やダムの運用を行う際には、環境影響評価で前提としていた調査データから変化が生じる場合もある。

論点1：ダム完成後までを見据えた長期にわたるモニタリングを行う上で留意すべき点について

例：水温の上昇、動植物の移植の時期、植生の変化（樹林化・森林の生長等）、流水型ダムの特徴や特性を踏まえたデータの蓄積 など

背景2：環境影響の最小化、環境再生や創出を目指す上では、流水型ダムの洪水調節地内だけでなく、ダム上下流の河道も含めて一体的に整備や保全に取り組んでいく必要がある。

論点2：川辺川において、ダム上下流の河道も含めて国と県が一体的に整備・保全に取り組む上で留意すべき点について

例：本流と支流、ダム区間と上下流の連続性・機能分担（流量、水温、冠水頻度、横断工作物、瀬淵）、保全・再生が必要な場所・機能（河畔林、湿地等）など

背景3：川辺川は、人と自然とのふれあいの活動の場としても重要な要素であるため、事業を進めていく上では、地域の方々とコミュニケーションをとりながら、地域の思いを反映していく必要がある。

論点3：地域住民と継続的にコミュニケーションを取る上での留意すべき点、地域で持続的に実践可能な取組（事例紹介）について

例：川辺川アカデミア、川辺川における地域連携の事例 など

背景4：ダム本体工事期間中は、既に整備済みの仮排水路トンネルを用いて、河川の流れを転流する必要がある。仮排水路トンネルを活用したアユの遡上実験では、河床部放流設備よりも長い仮排水路トンネルでアユが遡上していることを確認できた。一方で、転流期間中は実験よりも流量が増え、流速も速くなることから、アユをはじめとした魚類が遡上できるような更なる工夫が必要。

論点4：仮排水路トンネルにおける連続性の確保、流速の低減や休息場所の確保について

例：流速を抑えるための工夫、魚道の設置、明かりの確保 など

論点5：今後の会議の進め方や取り扱って欲しいテーマ、委員からの話題提供（研究成果や取組事例の紹介等）について